



# 挑戦 Challenge

# FC GIFU

FC岐阜  
株式会社岐阜フットボールクラブ  
代表取締役社長

連載Vol.

15

宮田博之氏

Jリーグは大競争時代に入ったと村井チェアマンが語った通り、ダゾーンを運営するパフォーム社からの放映権収入や賞金を原資とした、配分金の総額がJ1の1位、2位、3位、4位に入れば3年間で22.2億、11.9億、7.8億、5.5億の大きな金額を受け取れ、それ以外は3.5億となる。

J2降格すれば、1.5億になり2億円も放映権料が違うことになる。

J3の各チームでは3千万円の放映権料となり1.2億円の差となる。

いよいよJ3の17チームがJ2に昇格できる1位、2位を目指し、J2の22チームはJ1に昇格できる1位、2位を目指し、そして3位~6位のプレーオフ優勝者としてJ1に入ることも目指す。21位、22位はJ3に降格する。

そしてJ1の18チームが優勝、準優勝、3位、4位の高額賞金を目指して厳しい争いが繰り広げられ、16位~18位の3チームはJ2に降格する。

FC岐阜は昨シーズン辛うじてJ3降格を免れたが、今シーズンは10周年の記念すべき時であり、これからは毎年巻き込まれてきた残留争いと決別して、先ずはJ2で一桁順位に入ることを目指して、大木監督、全コーチ、選手が丸で毎日努力を重ねている。

大木監督の基本方針は、選手を育てて、チームワーク、パスワークで強くすることに徹していて、練習で出来ないことが試合で出来る訳がないとの信念の元で練習指導に熱を入れ叱咤激励の毎日だ。

厳しい練習にもかかわらず全選手が必死に練習に取り組んでいるが、皆の表情は明るく、こんなに練習が楽しく技術が自分の身に着くのを感じたのは初めてと口を揃えて言うのを聞き、そしてチームが着実に良くなってきたと聞くにつけても、嬉しいことであるが、すべての評価は今シーズンの結果による。

さて、一昨年までは毎年夏前には5~6名の負傷者がかかえて、夏場に多くの選手の補強を行うのが慣行になっていた。しかし、昨シーズンは岐阜市スポーツ交流センターの完成によって、一部をクラブハウスとして使用することが出来るようにな

ったことで、負傷者が出て医療チームの十分な治療が毎日受けられ、入浴、治療、リハビリが毎日出来るお蔭で、選手の補強は1名で済んだ。

昨シーズン、ホーム最終3戦を3連勝で飾れたのは、大観衆の応援のお蔭であったが、こうした岐阜市と医療関係者のご尽力にもよるものでもあり、心から感謝申し上げている。これから8か月の長丁場であるが、先ず負傷者が出ないことを祈りつつも、もし負傷者が出ても、素早い治療とリハビリで、早期に復帰できる安心感は大きい。

大木監督は、選手たちが長い準備運動を行い、試合終了後も練習後も、必ず、軽くジョギングや、ストレッチをしったりして体のメンテナンスの完了をもって、終了と認識していることは重要なことである。

特に高齢化時代の今、我々一般人も、事前運動だけでなく事後の体のケアも大変大切なことで、大いに見習うべきことである。また、ケガや事故による不具合は放置しないで、必ず外科医や整形外科医に診てもらって正しいリハビリ方法でメンテナンスを実行することが大切であることは言うまでもない。

天から授かった最大の財産である自分の心身の管理は、自分が一番わかるように心掛けるのが重要である。



写真：©Kaz Photography/FC Gifu

